

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組第99回定期大会 岩手・宮城・福島各県からの報告①  
岩手県教組 砂金書記長より

岩手は2・3週間遅れての学校のスタートとなりました。その間、子どもたちは、沿岸から内陸へそして県外へ、あるいは県外から岩手へという転出入が多く500人を超えました。地域コミュニティー、教育活動が大きく変わった中でのスタートです。それは、子どもたちにとっても大きな不安であり、そして悩みでもあったことでしょう。学校でもそれを知りながら、どうスタートすればいいか悩んでおりました。

しかし、教職員を迎えてくれたのは、子どもたちの笑顔でした。この笑顔が地域の救いであり、家族の支えとなって震災以降一ヵ月半学校が再開するまで、子どもたちが元気で、

復興をめざしながら日々努力してきています。現場に目をむけると、遊べない校庭、体育館が使えないためバス移動による体育、仕出し弁当での給食、スクールバス通学で一時間以上の登下校。最近では気温が高くなりすぎて、瓦礫臭そして魚の腐敗臭がひどく窓が開けられない状況があります。

こうした中に、教職員の苦労もありました。アパートを流され住居を失った教職員、自分の家族が亡くなっても仕事をせざるを得ない、そして長距離通勤をして体をぼろぼろにしながら現在仕事を続けている仲間。おそらくひと時も心が休むことがなかったのではないかと思います。今、私たちが心配しているのは、子どもたちの心のケアとともに教職員の心のケアであります。5月から始まったカウンセラーの第1陣が、6月中旬に終了しました。そして、各教育事務所に残ったカウンセラーのメンバーが各所を回るというごく少ない体制にかわったのが、大きな心配になっています。被災地にはアパートはもちろん、宿もなく、カウンセラーの人すら長期の仕事に耐えられる環境ではないというのが現実です。でも、カウンセラーの人たちは必要なんです。子どもたちがいつ心を病み、そしてフラッシュバックし不登校に入ったり、あるいは夜に泣いてしまったりと、様々なことが想定されるだろうと思います。

また、教職員の仲間も同じように、この間なかなか葬儀もできず仕事を続けてきている仲間の心の中には、家族というものをいつか取り戻したい、そしてとむらいをしてあげたい、そういった思いは必ずやあるだろうと思っています。この8月が新盆になります。そういった意味では、せめてこの夏休みは、学校現場の教職員は休ませたいという思いでいっぱいです。子どもたち、そして教職員、学校というのはすばらしいと思えました。子どもが地域の支えになれる、そして子どもの成長を現場で私たちが見られた、あまりいい機会ではありませんでしたが、その姿を垣間見ることができました。

背中にしょう竹網の背負いかごにおにぎりを入れて一軒一軒を回る子ども、余震があれば近所のお年寄りのお宅を回る子ども、学校では当たり前のように出した子どもたちの学校便り、その子ども新聞が地域そして避難所での希望と勇気を与えてくれているそういったとりくみの報告がありました。

今年度の岩手県教組の定期大会において出された討論のなかで、私たちの実践した教育は間違いではなかった、それを子どもたちのボランティアの姿に、そして子どもたちの笑顔にみることができたというふうに話をしてくれました。

今後も各単組の皆様にはご支援をいただかなければなりません。長いスパンで自分たちも復興を考え、そして1年1年、1ヶ月1ヶ月、少しずつとりくんでいこうと思っています。

希望をつなぐ、私たちも岩手の地で県教組・高教組ともに手を取りながら、小学生・中学生・高校生そして明日の岩手を背負ってくれる子どもたちのためにかかわっていきたくと思います。

